

低迷するビール需要の要因分析に関する研究

1220420 榎亜莉沙

指導教員 坂本泰義

研究背景

国税庁によると、国内の酒類消費量は、2010年以降は8500万kl台で推移している。これは、1966年のピーク時と比較して、約9割弱まで縮小している。中でも、ビールの消費量減少は著しく、特に「ビール離れ」の現象が確認されている。先行研究では、国内需要の落ち込みを所与として、海外展開を論じていた。

研究目的

そこで、本研究では、上述のビール離れ現象を分析するためには、ビール産業が市場との関係をどのように構築してきたのかを促す必要があると考える。そのため、国内のビール産業の歴史的展開や、海外のビール事情と比較することによって、今後のビール需要の推移を分析する事を目的とする。

調査・分析方法

文献調査を主とする。まずは、ビール産業が市場とどのような関係を構築してきたのか明らかにするために、まずは日本のビール産業の歴史の分析を試みる。それによって、導出されたビールの位置づけに対する仮説を検証するために、他国のビール産業と比較研究することによって分析を行う。

さらに、現代のビール市場メーカーのとっている戦略と対象比較することによって、今後のビール産業の動向を推察する。

分析結果

キリンのクラフトビールによる多様化の提供や、アサヒ、サッポロによる新たな「微アルコール」というジャンルの確立、サントリーの健康志向により特化したビールの製造等、品種化という仮説が検証された。

考察・結論

以上の分析により、今後、需要の下降傾向の現象が転じて増加傾向になる可能性があると考えられる。以上のような研究を通して、本研究の成果として次のようなことが言える。

・成果

国内需要の落ち込みを所与とせず、需要そのものに対してその動向を論じた。それにより、先行研究とは異なる需要の将来像を見出すことができた。